「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

	2024 年　5 月　31 日
所属部局・学年	野生動物研究センター 修士１年
氏　名	島田真優

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

宮崎県串間市・幸島

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

野生動物・行動生態野外実習

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

2024 年　5 月　7 日　～　2024 年　5 月　13 日　（7 日間）

４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

京都大学野生動物研究センター幸島観察所，鈴村技術補佐員，杉浦准教授，前田研究員

５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

写真（必ず１枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

今回の実習では，幸島のニホンザルと都井岬のウマの観察をおこなった。

◆　スケジュール
5/7 幸島観察所に到着，
5/8 幸島に到着した後.浜辺でニホンザルを観察
5/9 浜辺でニホンザルを観察した後,山の頂上付近まで登り，山中でニホンザルを観察
5/10 浜辺でニホンザルを観察した後，観察所に戻る
5/11 都井岬でウマを観察
5/12 収集した観察データについて発表
5/13 帰宅

◆　ニホンザルの観察
幸島には主群とマキ群の 2 グループとひとりオスが生息している。鈴村技術補佐員による給餌中(写真 1)とその前後に，浜辺に降りてきた主群のサルを至近距離で観察することができた。1 日目は個体識別が困難であったため,群れ全体を観察し，2 日目と 3 日目は子持ちのメス A と妊娠したメス B を対象に focal-sampling をおこなった。
メス A の採餌中，子ザルは母であるメス A の背中に常にしがみつき(写真 2)，周りを警戒するように見渡していた。メス A は子ザルを攻撃しようとした個体に何度か威嚇をし，追い払っていた。メス A は子ザルへの毛繕いと，他のメスとの毛繕いに多くの時間を費やしていた。他にも子持ちの個体はいたが，子ザルと過ごす時間は個体によって大きく異なっていた。メス A よりも優位のメスが子ザルと共に過ごす時間は，メス A に比べて短かったことから，母親の子への投資の程度は，母親の dominance rank の高さに影響を受けるのかもしれない。メス B は採餌に多くの時間を費やし，優位な個体からの要求に応える形でのみ毛繕いを行なっていた。採餌に多くの時間を費やしていたのは，妊娠中でより多くの栄養が必要だったからかもしれない。
山中での観察では，山道がないため，先頭の者がコンパス・地図・ GPS を用いて方角を確認しながら進みやすい道を探した。山中で何度かサルに遭遇したが，顔が見えなかったり音声のみが聞こえてきたりと個体識別や行動の観察は困難であった。しかし，動物園などでは見られない山中での様子を見ることができ，フィールドワークの難しさと醍醐味を同時に体験することができた。

写真 1 鈴村氏の給餌中，餌に群がる主群のサル.

写真 2 母親の採餌中，母親の背中にしがみつく子ザル.

◆　ウマの観察

都井岬では野生化したウマが生息しており，至近距離で観察することができた。前田氏曰く，ウマは 1 頭～2 頭のオスが複数のメスを率いるハーレム型のユニットを形成し，このユニットが複数集合して重層社会を形成する。都井岬においても，1 頭オスと 2 頭オスのユニットが見られ，複数のユニットが近接して存在していた。

ウマは大半の時間を採餌と休むことに費やしており，相互毛繕いや攻撃交渉はほとんど見られなかった。休む際は，ユニット単位で互いに身を寄せ合い，立ったまま頭を下げ，目を閉じて休む様子(写真 3)が観察できた。２頭のオスが率いているユニットでは，優位のオスが劣位のオスを牽制するようにユニットの内側を歩き，劣位のオスはその外側を歩く様子が観察された。優位のオスが糞をした直後に劣位のオスがその匂いを嗅ぐ行動も見られ，興味深かった。訪問時期がちょうど繁殖期であったこともあり，オスによるフレーメン(写真 4)や，メスに交尾を求める行動も見られた。母子間では，子ウマが母親に対して鼻を鳴らすという親和的な行動が見られた。数時間の観察だけでも，ウマは非常に微細で多様なコミュニケーション様式を持つことが窺えた。

写真 3 ユニット単位で身を寄せ合って休む様子.

写真 4 フレーメンの様子.

◆　感想

ニホンザルとウマの行動観察をするのは初めてであったため,大変興味深かった。また，山中で観察をおこなう際の必要な装備と，目標の方角への進路の決定方法を学ぶことができたため，今後山でフィールドワークをおこなう機会があれば，これらの知識と経験を活かしたい。観察データのプレゼンテーションでは，短時間でのデータ整理と英語での発表が求められ，とても良い練習になった。今後も練習を積んでいきたい。

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

６．その他（特記事項など）

引率してくださった杉浦先生,幸島でのサルの観察をはじめとし様々な場面でサポートしてくださった鈴村氏，ウマの観察をサポートしてくださった前田氏，幸島観察所での生活をサポートしてくださった皆様に深く感謝申し上げます。